

令和 8 年度 学力向上全体計画

学校名	墨田区立押上小学校
校長名	影山 祥仁

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
国語 ● 全学年で全国平均を上回る結果となっており、特に「情報の扱い方に関する事項」において高い成果が見られる。 ● 知識・技能だけでなく、思考・判断・表現の力も着実に育成されている。	● 「話すこと・聞くこと」や「書くこと」に課題が見られる学年があり、根拠を明確にして伝える力や、自分の考えを論理的に表現する力のさらなる向上を図る必要がある。
算数 ● 全学年において、知識・技能、思考・判断・表現ともに全国平均を上回っている。 ● 特に「数と計算」において高い成果が見られ、基礎的・基本的な内容の定着が図られている。 ● 「図形」や「変化と関係」においても高い正答率が見られ、数学的に考える力が育成されている。	● 「データの活用」や「図形」に課題が見られる学年があり、資料や図形の特徴を根拠として考察する力を高める必要がある。 ● 記述問題の正答率が低い傾向にあり、自分の考えや解決の過程を数学的な言葉を用いて説明する力の育成が求められる。
社会 ● 全学年において知識・技能、思考・判断・表現ともに全国平均を上回っている。 ● 地域社会の働きや都道府県の特徴、産業と情報との関わりなどについての理解が概ね定着している。 ● 基礎的な知識を問う問題では高い正答率が見られ、社会的事象への関心や理解が育まれている。	● 記述問題の正答率が低い傾向にあり、資料から読み取ったことを根拠として説明したり、自分の考えを表現したりする力の向上が必要である。 ● 地域の特徴や産業、自然環境と人々の生活との関連について、多面的・多角的に考察する力を育成していく必要がある。 ● 一部の領域で区平均を下回る学年が見られるため、資料活用を通して社会的事象を関連付けて考える学習の充実を図る。
理科 ● 多くの学年で「物質・エネルギー」「生命・地球」の両領域において全国平均を上回っており、基礎的な知識・技能の定着が見られる。 ● 思考・判断・表現の観点では全国平均を上回る学年が多く、観察や実験の結果を基に考察する力が育成されている。 ● 短答問題では高い正答率が見られ、基本的な科学概念の理解が進んでいる。	● 記述問題の正答率が各学年で低い傾向にあり、観察・実験の結果を根拠として科学的に説明する力の向上が必要である。 ● 全国平均を上回る学年が多い一方で、区平均を下回る領域や学年が見られ、より深い概念理解を図る必要がある。 ● 観察や実験で得られた結果を既習事項と関連付け、多面的に考察・表現する力の育成を継続して進めていくことが求められる。
英語 ● 「書くこと」において高い成果が見られ、自分の考えや情報を英語で表現する力が身に付いている。 ● 記述問題の正答率が高く、既習の語句や表現を活用して英文を書く力が育成されている。 ● 思考・判断・表現の観点では全国平均を上回っており、英語を用いて考えを伝える力が定着しつつある。	● 「読むこと」に課題が見られ、英文から必要な情報を読み取る力や内容を正確に理解する力を高める必要がある。 ● 語句や表現などの基礎的な知識・技能の定着を図るとともに、読む活動と書く活動を関連付けた指導の充実が求められる。 ● 様々な問題形式に触れながら、学習した内容を活用して解答する力を育成していく必要がある。

全体の成果 全教科を通して全国平均を上回る学年が多く、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が図られている。	全体の課題 (1) 記述・説明する力 ・分かっていても言葉で説明できない。 ・理由や根拠を明確にして書けない。 ・資料や実験結果を基に考察できない。 (2) 読み取る力・情報を活用する力 課題の姿 ・情報を集めることはできるが比較・関連付けが十分でない。 ・資料や文章から必要な情報を取り出せない。 ・読み取った内容を活用して考察できない。 (3) 学習した内容を活用する力 課題の姿 ・知識はあるが応用問題になると正答率が下がる。 ・理由や根拠を基に判断する問題に弱さが見られる。 全教科を通して基礎的・基本的な知識・技能の定着は見られるが、資料や文章、実験結果などから必要な情報を読み取り、根拠を明確にして自分の考えを表現する力に課題が見られる。また、記述式問題の正答率が低い傾向にあることから、説明する活動や書く活動を充実させ、思考したことを言語化する力の育成を重点的に図る必要がある。
---	---

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
・「学習意欲」のiスコアの学校平均が 3.2P と高い水準となっている。2 年生以外は全国平均よりも高い。 ・「充実感と向上心」のiスコアの学校平均が 3.4P と高い水準となっている。 ⇒上記の 2 つの成果は、昨年度の本校の取り組みの一つである「わかる授業」「楽しい授業」の成果と言える。	・「他者からの評価」のiスコアの学校平均が 2.7P と低い水準となっている。 ・「発信力」のiスコアの学校平均が 2.7p と低い水準となっている。 ⇒「他者からの評価」と「発信力」のiスコアが低い水準にあり、学年が上がるにつれて低下する傾向が見られる。自分の考えや行動が認められているという実感や、自分の思いを表現することへの自信に課題があることがうかがえる。そのため、自分の考えを伝える機会や互いを認め合う活動を充実させ、自己有用感と発信力の向上を図る。 ・「学習習慣」のiスコアの学校平均が 2.8p (2 年生を除くと 2.6p) と低い水準となっている。 ⇒成果にあるように、学習意欲は見られるものの、自ら継続して学習に取り組む習慣や、課題に応じて学習を進める力に課題が見られる。そのため、計画的な学習機会の確保とともに、自己の課題に応じて主体的に学習する力の育成を図る必要がある。

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
【「わかる授業」「楽しい授業」の実施】 ・既習事項を活用した学習場面を導入で設定することで、児童が既有的知識や経験を基に新たな学習内容を捉えられるようになり、意欲的に学習へ取り組む姿が見られた。また、学習の系統性を意識して学習計画を立てたことで、指導内容の重点化や個に応じた支援が可能となり、児童の理解の定着や主体的な学習につながった。また、基礎的・基本的な知識・技能の定着につながった。 【校内 OJT による指導力の向上】 ・主幹教諭または主任教諭と教諭で構成する学年別チームを編成し、教諭による公開授業を年間 3 回実施した。公開授業に先立ち、主任教諭の授業を参観して指導技術や授業展開を学び、それらを自身の授業改善に生かす取組を行った。また、授業観察だけでなく、事前の指導計画の作成段階から助言を行い、授業後には協議や事後指導を実施するなど、年間を通して継続的な指導・助言を行った。その結果、教材研究や指導方法の工夫が進み、教員の授業力向上につながるとともに、児童の学力向上にもつながった。 【計画的な ICT 活用による学習の充実】 ・教師が学習の目的や場面に応じて ICT 活用を計画的に取り入れたことで、児童の基本的な操作技能が定着してきた。また、情報収集や資料作成、発表活動等において端末を活用する経験を積み重ね、自ら必要な情報を集めることができるようになってきた。また、学習支援ソフト、ロイロノート等の基本的な操作方法も定着し、自分の考えをまとめたり発信したりするための様々な方法を経験することができた。	【ステップ学習の充実（朝学習）】 ・昨年度は、学校全体で継続的に取り組めるよう、月：国語、火：算数、水：読書、木：国語、金：算数と曜日で教科を指定して実施した。その結果、基礎的・基本的な知識・技能の定着や学習習慣の定着を図る機会を確保することができた。一方で、学年や学級によって児童の実態や課題が異なるため、重点的に取り組みたい内容とのずれが生じる場面も見られた。そこで今年度は、「みんなで同じ内容を同じタイミングで学習する」形から、学年・学級・個の実態に応じた課題に取り組む時間へと改善し、一人一人の実態に応じた学習の充実を図っていく。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 自分の考えに根拠をもって発信する力の育成

【1】根拠をもって表現する力の育成

全教科を通して、資料や文章、実験結果などから読み取った情報を基に、自分の考えを記述・説明する活動を充実させる。また、「結論・理由・根拠」を意識した表現活動を継続的にを行い、活用力及び記述力の向上を図る。

①全校共通の説明の型の活用

国語だけでなく全教科で「結論」「理由」「根拠」を意識した説明を行う。

- ・「私は～と考えます。」⇒「理由は～だからです。」⇒「資料（実験結果）から～が分かります。」

②授業の終末に振り返り（自分の考えを書く活動）の充実

- ・今日分かったこと、なぜそう考えたのか、次に知りたいことを短く書く。積み重ねることで記述力が向上する。

③資料活用場面の共通指導

国語、社会、算数、理科で「表」「グラフ」「地図」「実験結果」を読み取り、「何が分かるか」「なぜそう言えるか」を説明する活動を増やす。

【2】発信力を高める環境・授業展開の充実

児童が自分の考えや思いを表現する機会を日常的に設定し、話す・伝える活動の充実を図る。

①話す機会の日常化

朝の会や帰りの会における一言スピーチや振り返り発表を実施し、日常的に話す機会を設ける。

②対話的な学びの充実

授業ではペアトークやグループトークを積極的に取り入れ、自分の考えを表現する場を充実させる。

③段階的な交流活動の実施

「一人で考える→ペアで伝える→グループで共有する→全体で発表する」という段階的な交流活動を行い、誰もが安心して発言できる環境を整える。

④多様な表現方法の活用

自分の考えを文章や図、プレゼンテーションなど多様な方法で表現する活動を取り入れ、表現方法の選択肢を広げる。

(2)「発信力」向上のための、認め合う文化づくり（自己有用感の向上）

表現方法や発信方法を学んでいても、自ら発信しようとする姿につなげていない実態が見られる。このことから、自分の考えを伝えることへの自信や、発信したことが認められているという実感に課題があることが考えられる。発信した内容に対するフィードバックを充実させるとともに、互いに認め合い支え合う活動を通して、自分の考えや行動が集団に貢献していることを実感できる機会を増やす。これにより、発信することへの自信を高め、主体的な学習や行動へとつなげていく。

【1】フィードバックの充実

振り返りに対して教師や児童から肯定的なフィードバックを行い、自分の成長やよさを実感できるようにする。

①Nice ポイント制度の導入

⇒「Nice 発言」「Nice チャレンジ」「Nice サポート」など、授業の中や生活の中で、「Nice ○○」を集め、共有しながら、学習を積み重ねていく。教師が都度フィードバックを行いつつ学習を進めることで、児童同士でも認め合いができるように広げていく。

②レジリエンス教育を生かした自己有用感の向上

⇒レジリエンス教育の年間指導計画に沿って進め、失敗や間違いを恐れず自分の考えを発信できる児童を育成する。また、授業の中でも発信した内容や挑戦した過程を互いに認め合う活動を通して、自分の考えや行動が学級や学校に貢献していることを実感できる機会を設定し、自己有用感の向上と主体的な行動につなげていく。

自分の考えを安心して持つことができる、言える環境を作ることで、発信することの楽しさを味わいつつ、発信力の向上と合わせて目指していく。

(3) 主体的に学ぶ力の育成と習慣化

朝学習のやり方を見直し、学年・学級・個の実態に応じた学習機会を設定する。さらに、目標設定と振り返りを取り入れた自己調整学習を推進し、自ら課題を見付けて学ぶ力を育成する。(教師が学年、学級の実態に合わせて課題を選択する場合もある)

【1】自己調整学習の推進

①My 学習計画を活用した学習の実施

⇒金曜日の宿題で、来週の朝学習に何を学ぶのか「My 学習計画」を考えてくる。何をどのようにするのかを最初から考えることは難しいので、「読解コース」「漢字コース」「計算コース」「AI ドリルコース」「読書コース」など、学年である程度の課題を上げつつ、その中で何に取り組むかを自身で決定して取り組む。低学年は、用意したプリントから自分で取り組むプリントを選んで実施するなど合わせて行う。

課題の内容としては「問題データベース」「よむ YOMU ワークシート」を基本的には活用する。また、4～6年生は今年よりミライシードのテストパークを活用しているため、ミライシードのAIドリルの活用をして、より自身に合った学習を選択して行えるようにしていく。

【2】自分事として学ぶ授業づくり

①既習事項を生かした導入の工夫

⇒既習事項を基にした、導入を行うことで、「できるかも」という思いを高める。

②振り返りを生かした課題設定

⇒自分たちの振り返りの学びたいことや疑問の中から、自ら学習課題（問い）を考える時間をしっかりと設ける。
（教師が目的に合わせてファシリテートする）

（1）、（2）、（3）の取り組みを実践することで、「主体的に学ぶ → 論理的に考える、説明する → 発信する → 認められる → 自信がつく → さらに学ぶ（主体的に学ぶ）」のサイクルを目指し、「根拠をもって表現する力の育成」「発信力を高める環境づくり」「認め合いを通した自己有用感の向上」「自己調整学習の推進」を関連付けながら指導を進め、発信する力を核とした学力向上を目指す。

3 「令和9年度 墨田区学習状況調査」の目標

- ・iチェック「発信力」及び「他者からの評価」の学校平均 3.0 以上
- ・iチェック「学習習慣」の学校平均 3.0 以上
- ・各学年、各教科の区平均を上回る。
- ・各種学力調査における記述問題の正答率向上、無回答数を減らす。
- ・各教科 DE 層の 20%未満にする。（D 層→C 層への移行数を増やす）